

市区町村名	愛媛県 西予市	担当部署	政策企画部政策推進課復興支援室
		電話番号	0894-72-0843

1 取組事例名
のむら復興まちづくりデザインプロジェクト ～復興のパズル みんなでつくる 未来のカタチ～

2 取組期間
令和元年度～（継続中）

3 取組概要

【地域主体の復興まちづくり】

○平成 30 年 7 月豪雨災害で、西予市野村町野村地区は大規模な浸水被害を受けました。
○西野村地区の復興は、「直す（＝復旧）」「つくる（＝復興）」だけに留まらず、「未来に渡ってより良くする（＝復興まちづくり）」という考え方のもと、地域社会の担い手である全世代の住民が参画し、多様な主体との協働により未来のまちのカタチを描き、その実現に向けて歩みを進める「のむら復興まちづくりデザインプロジェクト」を行っています。

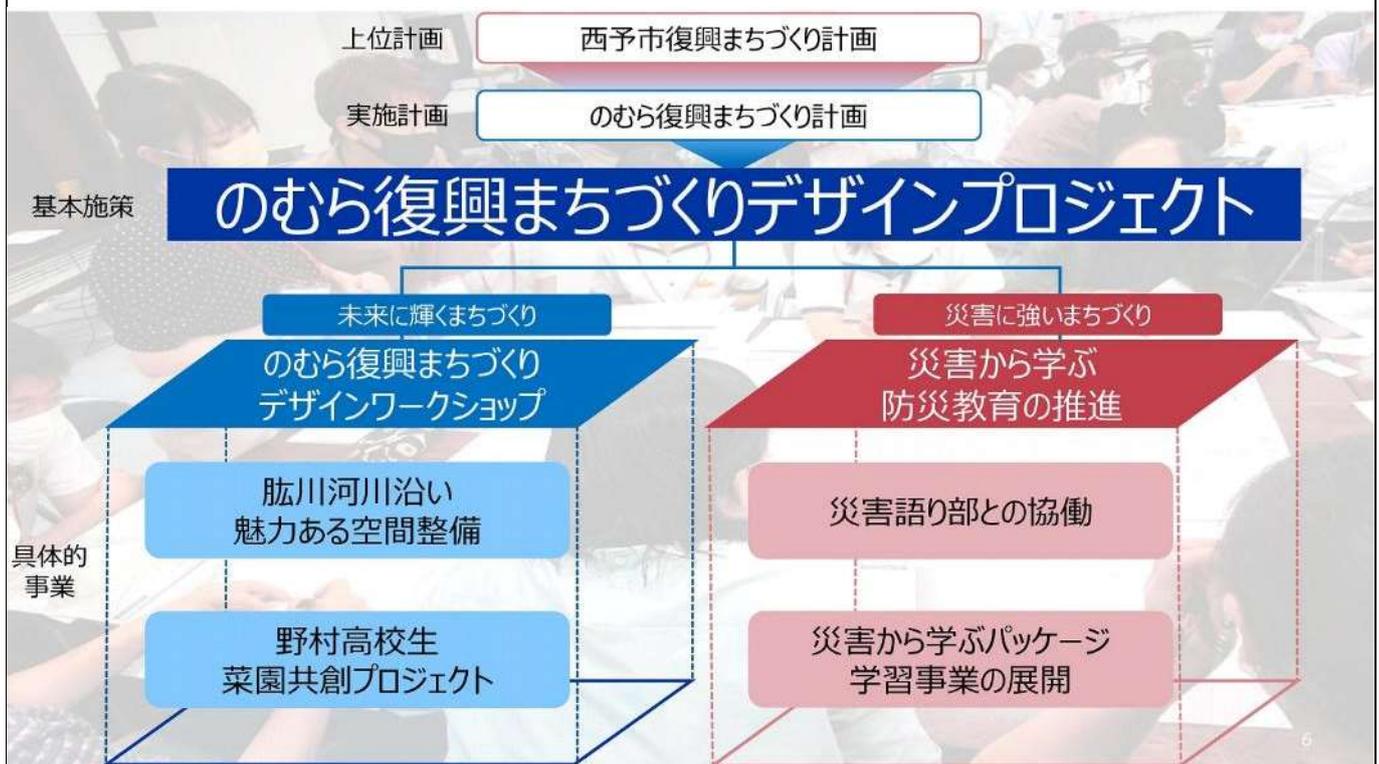


図 1： のむら復興まちづくりデザインプロジェクトの体系

4 背景・目的

【背景】

○西予市は、平成30年7月豪雨災害によって死者6名（直接死5名・関連死1名）、1,367件の建物被害など、甚大な人的・物的被害が発生しました。特に、西予市野村町野村地区では、一級河川肱川の氾濫により大規模な浸水被害が発生し、5名の尊い命が失われ、建物被害全体の約67%にあたる919件の建物被害が発生するなどしました。

○このような大規模災害からの復興を目指し、平成31年3月「西予市復興まちづくり計画（以下、「市復興まちづくり計画」と言います。）」を策定しました。この市復興まちづくり計画では、復興の目標を「復興のパズル みんなでつくる 未来のカタチ」と決めました。これは、市内小中学校の協力を得て、児童生徒から応募を行い、当時の中学3年生から提案があったものです。一人ひとりの力をパズルのピースととらえ、みんなで協力しながらピースを組み合わせることで未来のカタチを創っていこうという思いが込められています。

○この目標を体現すべく、ソフト事業において特に重要な施策と位置付けたのが、「復興まちづくりの推進」と「防災教育の推進」です。

○「復興まちづくりの推進」では、甚大な被害が発生した野村地区において、住民、各種団体、大学、地元企業、行政ら、多様な主体と協働した復興まちづくりを行う方針を掲げ、それらを体現すべく、令和元年5月から「のむら復興まちづくりデザインワークショップ（以下、「ワークショップ」と言います。）」を継続的に実施しています。

○一方、「防災教育の推進」では、災害の記録と記憶の伝承、それらを生かした災害に強いまちづくりの重点化を掲げ、令和2年10月に、復興のシンボルと位置付ける乙亥会館（野村町）内に「災害伝承展示室」を整備しました。単に災害の記録を展示することだけに留めず、災害の記憶も語り継いでいく場として、語り部団体、大学と協働して災害伝承・防災教育の拠点として活用しています。

○現在、この二つの取組みを両輪として「のむら復興まちづくりデザインプロジェクト（以下、「プロジェクト」と言います。）」を実践しています。

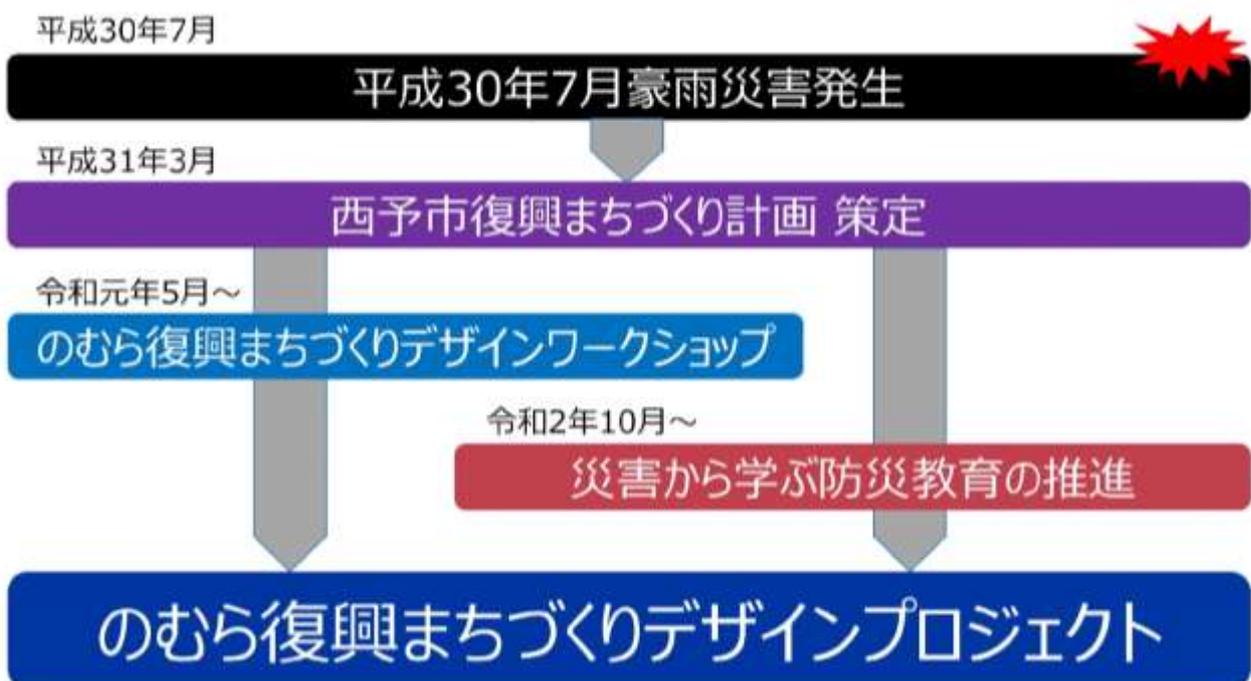


図2：時系列表

【プロジェクトの目的】

【ワークショップ】

○河川沿いの大規模な再整備に向けて、「行政主導型+（一部分で）住民が参加する」という従来の方法論を刷新し、一連の工程に住民らが参画し続ける「住民主導型+多様な主体との協働」により行うことで、使いやすい魅力ある空間を創ります。

○未来に飛躍する復興まちづくりを目指し、次代を担う若者が主体的に活躍できる場を創り、実践します。

○空間の有効活用を見据え、整備後に「ハードからソフトへ切り替える」という考え方ではなく、整備前から「ハードとソフトの一体的融合」を実践します。

【災害から学ぶ防災教育の推進】

○災害を悲劇とだけにせず、災害の記録と記憶から学び、防災を実践します。

○体系的な防災学習プログラムを構築し、義務教育期間に重点的に防災を学ぶ機会を充実させます。

○ひとり一人の学びと実践が、地域全体に波及し、ひいては災害に強いまちづくりにつながるよう「学びの循環」を目指します。

5 取組の具体的内容

【ワークショップ】

○取組内容

・主 催：西予市（協力）愛媛大学 東京大学復興デザイン研究体

・参加者：

- ・ 野村地区自治会及び社会教育団体等の公的団体代表者
- ・ 西予市内在住者から募った一般参加者（※地元企業含む）
- ・ 野村高等学校、野村中学校生徒
- ・ 愛媛大学社会共創学部学生
- ・ 西予市議会議員 など

・運営方針及び方法：

- ・ 参加者の報酬は無報酬とし、出欠、入会、退会等出入り自由としています。
- ・ 結果は、西予市復興まちづくりかわら版及び西予市ホームページで随時公開しています。
- ・ 少人数のグループに分かれて、各参加者が意見を付せんに書き出し、グループ化しながら全体の意見となるようまとめます。意見に対しては、その背景や原因を考え、課題を抽出します。最後にグループごとにまとめた意見を発表することで、全体で意見の共有を図ります。
- ・ 全体のファシリテーターを愛媛大学社会共創学部松村暢彦教授が担うほか、学生が(各2名程度)各グループのファシリテーターや書記等の補助を行います。

・開催時期：令和元年5月～令和4年3月

・回数：計16回

・参加者数：延べ520名

表1：開催結果

回	開催日	テーマ・内容	出席者(人)
第1回	令和元年 5月24日(金)	○開催主旨 ○野村高校の生徒が想う復興まちづくり提案の発表 ○グループワーク	23

		<ul style="list-style-type: none"> ・野村での思い出、残したいもの ・野村での過ごし方 <p>○グループワークの発表</p>	
第2回	6月24日(月)	<p>○第1回の振り返り</p> <p>○グループワーク</p> <p>第1回の結果を基に、4つのテーマを設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肱川(宇和川)とその周辺の整備・活用 ・商店街の活性化 ・野村の文化の継承と観光 ・日常生活サービスの維持・更新 <p>第3回目以降、各論掘り下げてグループワーク</p> <p>○グループワークの発表</p>	30
第3回	7月23日(火)	<p>○第1回及び第2回の振り返り</p> <p>○河川沿いを利用した整備事例の紹介</p> <p>○グループワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肱川(宇和川)とその周辺の整備・活用 <p>○グループワークの発表</p> <p>○ポイントシールの貼り付け(共感できる意見にシールを貼り、全体での共有を図る。)</p>	31
第4回	8月22日(木)	<p>○第3回の振り返り</p> <p>○グループワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肱川(宇和川)と川沿いの空間整備・利用案 ・商店街の活性化と野村の文化継承 <p>○グループワークの発表</p>	29
第5回	9月25日(水)	<p>○第4回の振り返り</p> <p>○災害時の避難について(平成30年7月豪雨災害時の避難の状況)</p> <p>○グループワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肱川(宇和川)と川沿いの空間整備・利用案 ・日常生活サービスの維持・更新 <p>○グループワークの発表</p>	24
第6回	10月24日(金)	<p>○第5回の振り返り</p> <p>○のむら復興まちづくり計画について</p> <p>○グループワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・のむら復興まちづくり計画の修正・追加 ・各主体が行うこと・行いたいこと <p>○グループワークの発表</p>	21
第7回	12月18日(水)	<p>○第6回の振り返り</p> <p>○河川沿い空間の基本設計に向けた提案</p> <p>○グループワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・左岸の空間・利活用ゾーニングについて ・右岸の空間・利活用ゾーニングについて 	18

		○グループワークの発表	
第8回	令和2年 2月16日(日)	○第7回の振り返り ○河川沿い空間の基本設計検討案の説明 ○グループワーク ・現地確認 ・必要な空間とその理由について ○グループワークの発表とまとめ	30
第9回	7月13日(月)	○第8回の振り返り ○復興事業の進捗状況と今後の事業展開について ○河川沿い空間の基本設計検討案の説明 ○グループワーク ・河川沿いの空間利用計画案について ・利活用。管理運営について ○グループワークの発表とまとめ	41
第10回	10月21日(水)	○野村地区肱川周辺水辺まちづくり計画案(河川沿いの空間利用計画)について ○第9回の振り返り ○野村高校生によるプロジェクトの提案 ○グループワーク ・野村高校生によるプロジェクトの提案を受けて ○グループワークの発表とまとめ	39
第11回	12月7日(月)	○第10回の振り返り ○菜園エリアについて ・基本設計の具体的内容 ・実施設計～工事の流れ ・管理運営 ○グループワーク1 ・菜園の活用・維持管理に関わる活動 ○グループワーク2 ・防災広場、林の広場、森の広場の活動主体 ○グループワークの発表とまとめ	30
第12回	令和3年 3月4日(木)	○第11回の振り返り ○グループワーク1 ・様々な活動主体への聞き取りからの提案 ○グループワーク2 ・三嶋神社エリアを活用した試行の提案 ・社会実験「野村高校菜園共創プロジェクト」 ○グループワークの発表とまとめ	48
第13回	7月8日(木)	○第12回の振り返り ○野村高校生「菜園共創プロジェクト」の取組報告 ○右岸側実施設計の説明 ○グループワーク1 ・自然憩いエリアの検討	44

		○グループワーク 2 ・三嶋神社周辺エリアの検討 ○グループワークの発表とまとめ	
第 14 回	11 月 4 日 (木)	○第 13 回の振り返り ○肱川右岸側の実施設計の説明 ○野村高校生「菜園共創プロジェクト」の取組報告 ○グループワーク ・左岸側 (レクリエーションエリア) の検討 ○グループワークの発表とまとめ	41
第 15 回	12 月 23 日 (木)	○第 14 回の振り返り ○野村高校生「菜園共創プロジェクト (収穫物の販売イベント)」の取組報告 ○左岸側実施設計の説明 ○グループワーク ・左岸側の空間利活用・維持管理活動にイメージの共有 ○グループワークの発表とまとめ	38
第 16 回	令和 4 年 3 月 31 日 (木)	○第 15 回の振り返り ○野村高校生「菜園共創プロジェクト」一年間の活動報告 ○左岸側 (レクリエーションエリア) 前回意見を反映した内容の説明 ○グループワーク ・左岸側レクリエーションエリアの事前活用について ○グループワークの発表とまとめ	33



写真 1 : ワークショップの様子

○実績

- ・野村地区の復興まちづくりの全体将来像となる「のむら復興まちづくり計画」の策定
- ・肱川河川沿いの魅力ある空間整備に関する基本設計図及び実施設計図の作成
- ・次代を担う若者 (野村高校生) による菜園共創プロジェクトの実践

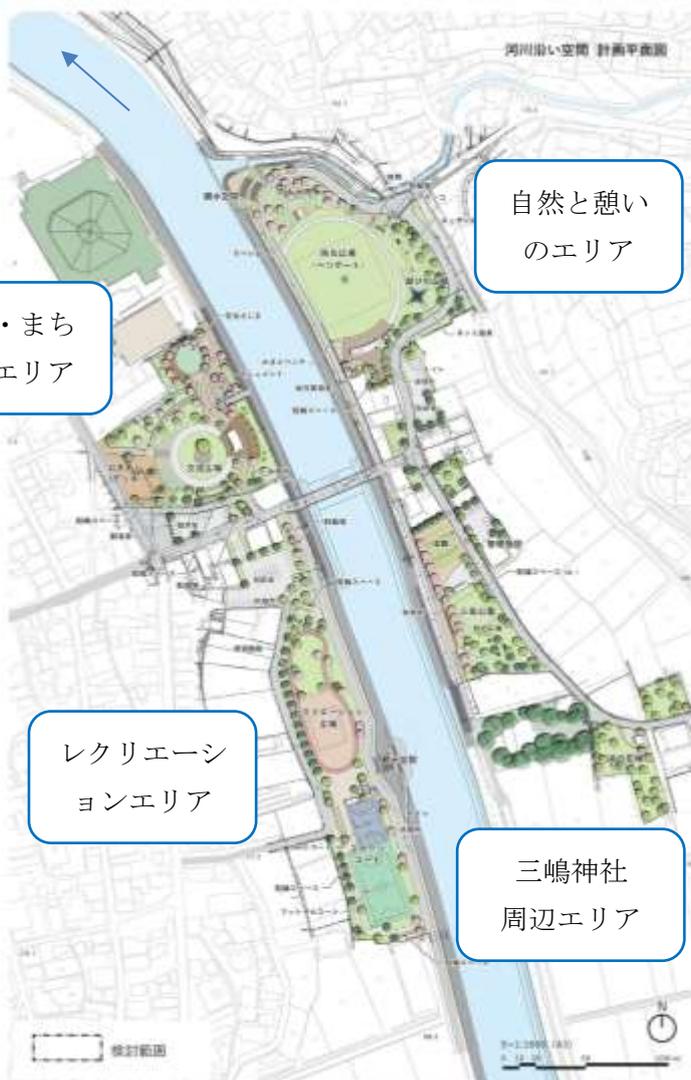
○のむら復興まちづくり計画の策定



図3：のむら復興まちづくり計画(令和2年3月策定)

第1回から第6回までのワークショップで出た意見を取りまとめ、4つの大きなテーマ(目標)を設定しました。

○肱川河川沿いの魅力ある空間整備に関する基本設計等の作成



- ・第7回から第11回のワークショップを経て基本設計を取りまとめました。
- ・設計では、肱川を中心として4つのエリア分けたゾーニングとしています。
- ・右岸側下流：自然と憩いのエリア
上流：三嶋神社周辺エリア
- ・左岸側下流：乙亥・まちなかエリア
上流：レクリエーションエリア
- ・第8回から第14回のワークショップで、右岸側の実施設計を取りまとめました。
- ・現在 (R4.5月時点)、左岸側の実施設計の作成に向け議論を重ねています。



図4：基本計画平面図(一部改)

図5：自然と憩いのエリアパース

○次代を担う若者（野村高校生）による菜園共創プロジェクトの実践

- ・第1回目のワークショップで「野村高校の生徒が想う復興まちづくりの提案」が発表され、次代を担う若者が活躍する場を創出し実践していくことの重要性が示されました。
- ・その後、第10回目のワークショップで、計画の実践となる「菜園共創プロジェクト構想」が提案され、以後のブラッシュアップを経て、令和3年度から本格始動しました。
- ・これは、空間整備の対象エリアの一部である被災した農地約2,000㎡を活用し、本整備が開始されるまでの期間を利用して、作物や景観作物を育て、栽培過程を地域と協働し、収穫物の加工品開発などを行おうというものです。
- ・活性化に寄与する復興まちづくり活動を現段階から試行することで、整備後の空間の有効活用につなげていくものであり、プロジェクトの目的である「次代を担う若者の活躍の場づくり」「整備前からのハードとソフトの一体的融合」を実践するものです。

表2：取組内容

時期	内容	備考
令和3年 5月	○さつまいもの苗の定植 ○ひまわりの播種	
6月～7月	○地域住民と協働して維持管理作業（草刈、畝上など） ○ワークショップでの活動経過報告	
8月	○地元小学生らと共に、ひまわり畑を活用したイベント及び動画配信を実施	
9月	○ひまわりの種の収穫 ○コスモスの播種	
10月	○地元保育園、幼稚園、愛媛大学、地域住民らと共にさつまいも収穫イベントを開催	
11月	○収穫したさつまいもを活用した販売イベントを開催 ○ワークショップでの活動経過報告	地域の一大イベント「乙亥大相撲」に合わせて開催
12月	○さつまいもを活用した「灰屋いも体験」を開催 ○ワークショップでの活動経過報告	石灰の化学反応熱を用いた焼き芋づくりの手法
令和4年 3月	○ワークショップでの一年間の活動報告	



図6：菜園共創プロジェクト実施個所（右岸側上流：三嶋神社周辺エリアの一部）



▲ 地域協働による維持管理



▲ 播種作業



▲ ひまわりイベント



▲ さつまいも収穫イベント



▲ さつまいも販売イベント

写真2：菜園共創プロジェクト実施の様子

【災害から学ぶ防災教育の推進】

○災害伝承展示室は、「事実を知り、学び合い、備えの先にいのちを守る」というテーマを掲げています。これは、災害の教訓を生かし二度と同じ被害を繰り返さないために、正確な事実を知り、話し合いや学習行動を通じて学び合いを深め、想定される災害に備えていこうという思いが込められています。このテーマを実現するため、主に以下の2つの施策を実施しました。

- ・災害語り部グループ「語り部 018 のむら」との協働
- ・多様な防災学習機会を提供する「災害から学ぶパッケージ学習事業」の推進



写真3：乙亥会館 災害伝承展示室内の様子

○災害語り部グループ「語り部 018 のむら」との協働

- ・「語り部 018 のむら」は、災害当時を経験した地元住民有志 10 名によって結成された災害語り部グループであり、災害伝承展示室の案内をはじめ、被災地域を歩きながら当時のことを語り継ぐ活動を行っています。
- ・令和2年10月災害伝承展示室のオープニングセレモニーではじめての案内活動を行い、同年11月に一般利用者の案内を開始したことを皮切りに、令和3年12月末までに43の個人と団体合わせて720名以上を案内しました。
- ・案内コースは、有識者を招いたコースづくりのワークショップや当時野村地区で活動した支援団体を招いた勉強会などを複数回重ね、3コースを設定しました。

・ Aコース 表3：コース別の内容

内容	災害伝承展示室を中心に学ぶコース
時間	60分
コース	災害伝承展示室 → 乙亥会館テラスから河川を展望 など

・ Bコース

内容	災害伝承展示室を案内後、被災した地区（上流側）を歩きながら学ぶコース
時間	90分
コース	災害伝承展示室 → 三島町地区 → 三嶋神社 など

・ Cコース

内容	災害伝承展示室を案内後、被災した地区全域を歩きながら学ぶコース
時間	120分
コース	災害伝承展示室 → 三島町地区 → 三嶋神社 など

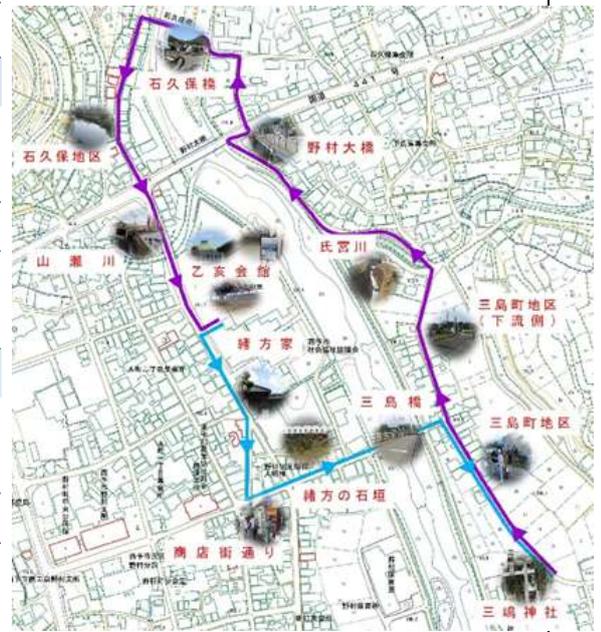


図7：ルート（青：Bコース、紫：Cコース）



写真4：語り部の様子

○多様な防災学習の機会を提供する「災害から学ぶパッケージ学習事業」の推進

・語り部による活動を通じ、特に市内小中学校の防災学習の需要が高いことから、令和3年4月、市内小中学校向けに「災害から学ぶパッケージ学習事業」をスタートさせました。

・これは、災害伝承展示室を防災学習の拠点として有効に活用しつつ、更に各機関・各部署（語り部、愛媛大学、愛媛県歴史文化博物館学芸員、市危機管理課、市経済振興課ジオパーク推進室、市復興支援室）が持っている学習メニューと組み合わせる（＝パッケージ化）ことで、多様かつ質の高い防災学習の機会を提供するものです。

・学習プログラムは、災害伝承展示室での学習（必須学習）に合わせ、自由に選択できる13のプログラム（選択学習）を用意しています。

・本事業の推進にあたっては、西予市教育委員会が所管する子ども教育を振興するための基金を活用している他、教育委員会と連携し、西予市防災教育推進連絡協議会の方等で複数回に渡り教職員向けに説明・周知を行うことで事業の浸透に努めています。

表4：学習メニュー一覧

必須学習	
展示室を活用した学習（3パターンから選択可能）	
見学のみ	60分
災害語り部による案内・解説あり	60分
災害語り部による案内・解説（短縮 Ver）	30分

選択学習	
13のメニューから学びたい内容を選択 ※（）内は学習を担当する機関・部署	
地図から読み解く減災学習（ジオパーク推進室）	45分～
大地の下を見つめてみよう！（ジオパーク推進室）	45分
ブラのむら～ジオ×防災 まちを歩いて考えよう！～（連携）	120分
地震から命を守る（危機管理課）	45分～
風水害から命を守る（危機管理課）	45分～
避難のときに命をつなぐ大事な物を選ぼう（危機管理課）	45分～
自助・共助の重要性を学ぶ（危機管理課）	45分～
みんなが安心してすごせる避難所をつくるために（愛媛大学）	90分
未来の防災倉庫を置いたらどこに？（愛媛大学）※	360分
クロスロードで学ぶ防災（愛媛大学）	45分
防災キャンプ（愛媛大学他）※	1泊2日
マイタイムラインを作ろう（愛媛大学）	要相談
災害VR・ARの視聴（復興支援室）	30分

・利用が進むにつれて、継続した防災学習を行いたいというニーズの高まりがあることが分かり、愛媛大学社会共創学部副学部長 松村教授、同大学教育学部 井上准教授のご協力のもと、体系的な継続学習用プログラムを構築し、令和3年10月より野村小学校6年生（当時）の総合的な学習の時間で実施しました。

表5：継続学習用プログラム

回	内容	備考
1	クロスロードで学ぶ防災	2コマ 90分
2	西予市防災マップで防災を学ぶ	2コマ 90分
3	マイタイムラインをつくろう	2コマ 90分 事後学習あり
4	防災倉庫をテーマに避難を考える	2コマ 90分 事後学習あり
5	災害伝承展示室からの学び	2コマ 90分 事後学習あり

・前半では、クロスロード（判断の分かれ道）、防災マップ、タイムラインなどを学ぶことを通じて、「防災とはなにか」を深く考えることから始まり、災害が起きた時の対応、災害が起きる危険がある段階での備えや心構え、そして平時における事前準備や備えの大切さを学ぶことができます。「準備や備え」と一言と言ってもその内容は多岐に渡ります。それらのことを防災マップの活用、マイタイムライン作成によって知識獲得と実践を繰り返し、災害対応力と応用力を引き上げていきます。

・後半では、防災倉庫をテーマとして自助・共助・公助を学びながら、災害時「みんな」が有効に防災倉庫を活用するために必要な要素等を考えます。防災倉庫の存在は認知していても、そこに入っている物、鍵の管理者等が分からないことに着目し、それらの解決策についてグループワーク等を通じ考えていきます。最終回では、災害伝承展示室に舞台を戻し、これまでの学習を通じて学んだことを他者（次世代）に伝承するため、何を伝えるべきかを考え言葉にする学習を行いました。これには、学びをアウトプットすることでより深い理解と応用につなげる狙いもあります。



写真5：パッケージ学習の様子

・継続学習用プログラムは、受講後に事後学習を積み重ね、成果物を制作し災害伝承展示室に展示をしました。これは、児童個人の学びだけに留まらず、児童たちの学びが次の人の学びにつながるような「学びの循環」を目指すためです。

・各児童が「自分たちが伝承したいこと」をテーマに、「歩み」を表現した自らの足形の上に、伝承したい内容を記載し展示しています。

・また、防災倉庫をテーマにした学習で考えた課題の解決策を、「防災倉庫活用ガイドライン」としてまとめ、小学校の防災倉庫に掲示しました。



写真6：学習成果の展示

6 特徴（独自性・新規性・工夫した点）

【ワークショップ】

○ワークショップは、愛媛大学の全面的な協力があって成立しています。社会共創学部松村教授を先頭に、専門的なアドバイスをいただきながら、それを基に議論・修正・合意形成が成立しているほか、学生が住民らと同じテーブルで議論に参加することで、住民らの意見を出しやすい環境が醸成され、老若男女問わず活発な議論を展開することができています。

○従来の住民参加型ワークショップで見られるような特定の一場面、あるいは、短期間における住民参加ではなく、冒頭の方針づくりから設計の詳細な内容を詰める場面まで、徹底して住民主導型で議論を重ねてきました。

○ワークショップの運営は、行政内外に関わらず、明確な役割分担に基づいているため、特定の部署に過度な負担が集中せず、継続かつ円滑に運営をすることができています。(事務局：市復興支援室、専門技術的な事務（設計等）：市建設課、ファシリテーション等：愛媛大学、菜園共創プロジェクトの運営：野村高校 など)

○継続性のあるワークショップであるが故、負担感の増大につながらないように、出欠、入会、退会等出入り自由としています。

○ワークショップがブラックボックスにならないよう、議論の結果は西予市ホームページで公開する他、独自の復興誌「西予市復興まちづくりかわら版」を作成し、市内全域に配布（野村地区をはじめ一部地域全戸配布、その他地域は行政区ごとに配布）しています。また、ワークショップ参加者のうち当日欠席をした人にも、資料及び結果を送付しています。

○魅力ある空間整備後を見据え、次の世代を担う若者のアイデアや意見を大胆に取り入れ実践に移しています。丁寧な議論の下敷きがあるからこそ、地域も主体となってその実践をバックアップし、共にブラッシュアップしていく良い関係性の中で復興まちづくりを進めることができています。

○従来、同じ世代、同じ立場、同じ考えなどで結びついた属性型の団体が、それぞれでまちづくり活動を行うことが多かったですが、災害を契機とした復興まちづくりの実践を積み重ねる中で、それぞれの立場の住民が一堂に会し議論する機会が増え、一人称で真剣にまちの将来を考える機会が増えました。

【災害から学ぶ防災教育の推進】

○災害を風化させないためには、記録と記憶の双方の伝承が重要であると考えています。災害伝承展示室が「記録」を、語り部団体が「記憶」を語り継ぐことで、多面的な防災学習を可能にしています。

○最新のVRやARなどの技術を活用することで、災害の疑似体験を可能にし、早期避難行動の重要性を体験型で学ぶことを可能にしています。

○従来、個々の部署等で実施していた防災学習プログラムを一元的にまとめることで、利用しやすい学習環境を整備するとともに、ニーズに応じた学習機会を提供することを可能にしています。

○インプットとアウトプットの相互学習を行うことで、深い理解と応用力を養うことを可能にしているほか、アウトプットを公に展示することや情報発信することで、個人の学びが次の人の気づきや学びにつながるよう工夫しています。

7 取組の効果・費用

【ワークショップ】

○「のむら復興まちづくり計画」を受けて、計画の実現に向けて、行政として何ができるかを検討しアクションプランとしてとりまとめ実行しています。アクションプランは「今、市ができること」を中心に作成したものであり、地域住民や各種団体との連携を深めることで更なる展開・発展が期待されます。

○現段階から、魅力ある空間整備後の維持管理・活用を円滑に推進していくことを目的として、「のむら公園づくりプラットフォーム（仮称）」の設置構想を進めています。これは、現在のワークショップのプラットフォームをより発展させ、住民、各種団体、企業、大学、行政らで構成しようというもので、従来のように公共施設の維持管理を行政のみが担う形式ではなく、

多様な主体の協働によって維持管理・活用を進めようとするものです。この構想の実現によって、空間への愛着や誇りの醸成の他、ランニングコストの低減などの効果が期待できます。

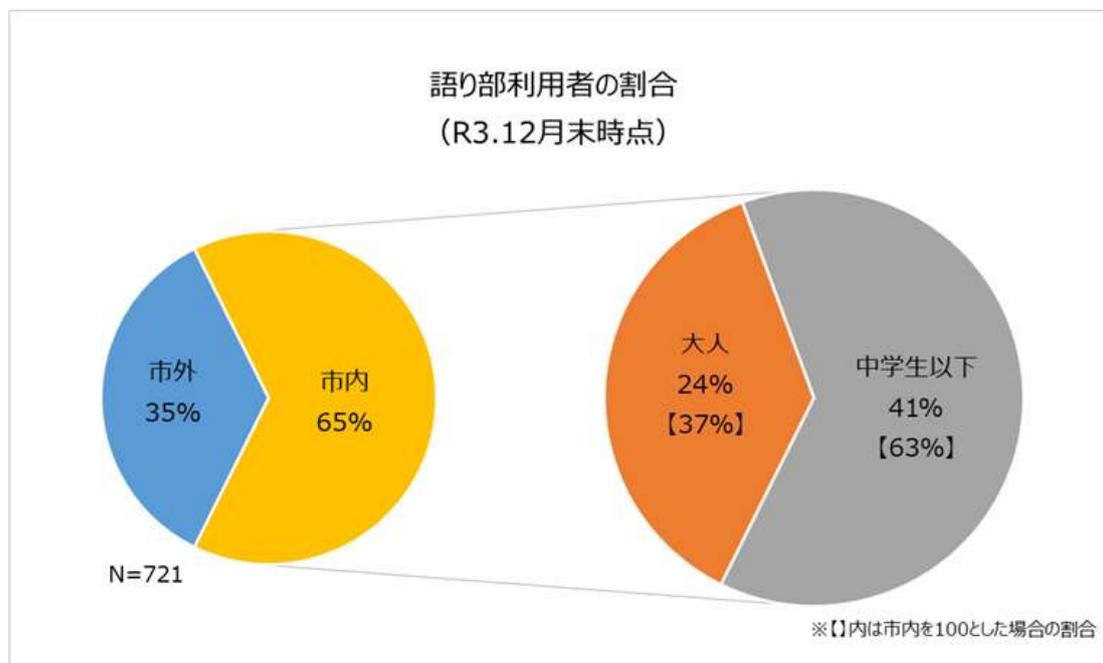
○野村高校生の一年間の実践を間近で見ていた野村中学校、野村小学校が復興まちづくりへの関心を抱き、令和4年度から、野村中学校は全校生徒が、野村小学校は5年生と6年生がそれぞれ、総合的な学習の時間を活用して、復興まちづくりの実践活動を行うことになりました。小-中-高-大と切れ目のない復興まちづくりを実践する環境が整備されたことで、将来の高校魅力化につながる効果などが期待できます。

【災害から学ぶ防災教育の推進】

○語り部による災害伝承展示室内の案内では、展示物の解説のみならず、写真やテロップを使い災害当時の様子を克明に伝えている他、自らの経験を踏まえた教訓を伝えるなど防災学習の推進に大きく貢献しています。また、被災地域を歩くコースでは、地元商店主らとも協力し、浸水時の状況を克明に伝えるなどしています。

○利用者からは、展示物から知ることができる情報とはまた違い、経験に基づく話で当時の状況をより具体的に知ることができる点や、教訓化された話で今後の防災への学びが多い点などが評価されています。

○利用者の割合をみると、市内利用者の6割以上は中学生以下の児童生徒が占めており、義務教育期間中の防災学習の重点化に貢献しています。また、市外からの利用者も全体の3割以上あり、主な利用動機は研修によるものであり、災害を契機とした学習需要は市内に留まらず一定数存在することが窺えます。また、新型コロナウイルス感染症の拡大により度々申込の受付を停止するなどしてきましたが、その影響を差し引くと年間を通じた学習需要があることが分かります。



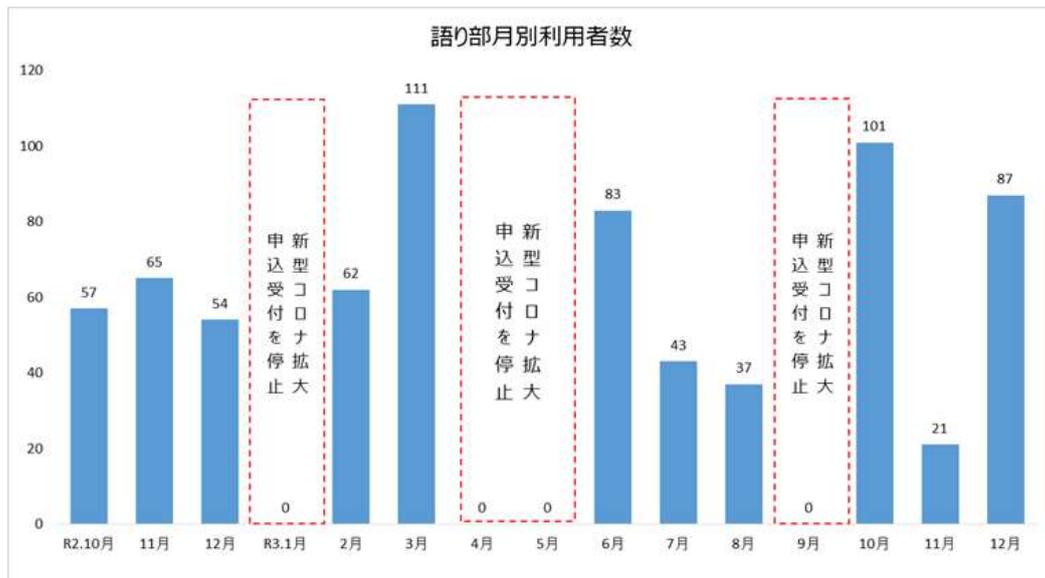


図8：語り部利用者の集計（作成：西予市復興支援室）

○野村小学校で実践した継続学習用プログラムでは、愛媛大学が実施した児童とその保護者を対象とした防災学習の効果を図るアンケート調査において、学習前と比較して、学習を受けた後では、「避難場所に関する知識」を「よく知っている」と答えた児童が36%から64%に大幅に増加した他、「自己効力感（日頃から災害に備えられますか？を問う）」を「とても思う」と答えた児童は11%から18%に増加、「集団効力感（家族や地域と協力して災害に備えられますか？を問う）」を「とても思う」と回答した児童は15%から19%に増加、「思う」と答えた児童は28%から49%に増加していることが確認されました。

○また、防災意識を育てるためには家族とのコミュニケーションが大切であることも分かりました。

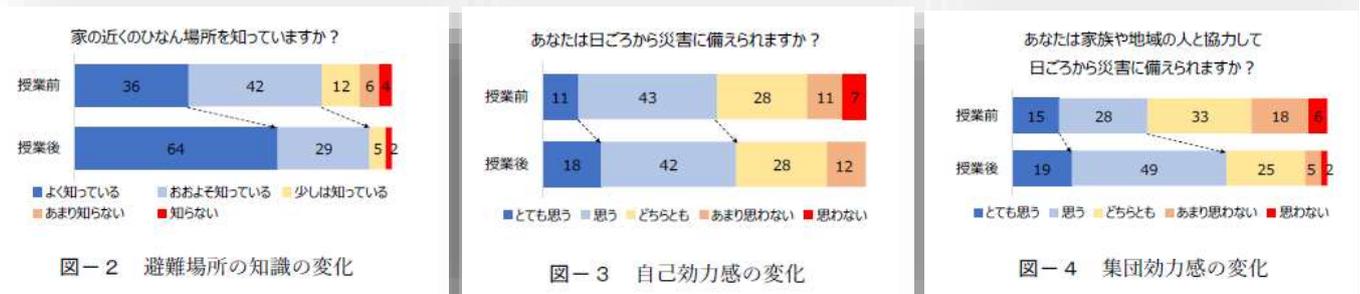


図9：愛媛大学社会共創学部 松村暢彦・坂口柊矢「野村小学校6年生の防災学習の効果の検証」より

8 取組を進めていく中での課題・問題点（苦労した点）

○ワークショップでは、当初設計に反映した内容が関係機関との協議の末、技術・予算的な観点から設計から外さざるを得ない面があり、実現性の観点から調整が困難なことがありました。

○ワークショップは、膝を突き合わせて議論をすることで多様かつ活発な意見を引き出すものであるが故、十分な新型コロナウイルス感染症対策を取るために、開催回数を減らさざるを得ないことがありました。一部オンライン形式と対面形式をハイブリッドさせて運営しましたが、オンライン参加者に会場全体の雰囲気や意見内容を共有するためには、そこをマネジメン

トする担当が必要になるなど、依然として模索をしながら進めている状況です。

- 語り部において、当初事前予約制・料金前払い制を採っていましたが、新型コロナウイルスの影響により直前キャンセルがあるため、事前予約制はそのままに、返金処理を防ぐため、料金は当日払いとするなど、キャンセル時の事務負担軽減のための工夫が必要となりました。
- 災害VR・ARの学習利用では、台数に限りがあるため大人数での利用の場合、アイドルタイムが発生しないよう他の内容と組み合わせるなど案内するなど工夫が必要となりました。
- また、現在整備しているVR機材では、利用者しか画面内容を把握できないため、操作ガイドが難しいということが挙げられます。

9 今後の予定・構想

【ワークショップ】

- 引き続きワークショップを継続し、右岸側の実施設計の作成を進めていくとともに、のむら復興まちづくり計画に掲げる「地域経済の活性化」「地域文化の伝承」など、復興まちづくり全般につながる実践を進めていきます。
- 「のむら公園づくりプラットフォーム（仮称）の構築を進めていきます。
- 野村高校の菜園共創プロジェクトの継続と共に、新たに参画する野村中学校、野村小学校と連携を密にした復興まちづくりの実践を進めていきます。
- ワークショップの運営母体に、野村地区の地域づくりを行う住民組織である野村地域自治振興協議会が参画できる体制づくりを進め、将来的にテーマを広げ、地域全体の語りの場・情報共有の場として発展させていくことを目標にします。

【災害から学ぶ防災教育の推進】

- 継続学習プログラムを他校でも実践できる環境整備を進めていきます。
- 新学習指導要領を踏まえ、より体系的な防災学習の在り方を検討します。
- 防災学習を通じて得た学びの成果などを、ワークショップの場で共有し、地域全体の防災まちづくりにつながる取組みへと展開していきます。
- 河川沿いの空間整備後も当該エリアが防災学習の拠点となるよう、語り部団体と協働しながら、当該整備エリアにおける案内コースの設定や整備前後のまちの比較を伝承するなど、復興まちづくりと防災学習を関連付けた取組みを進めます。

10 他団体へのアドバイス

- 多様な主体との協働は、言い換えれば、調整先が増えることでもあります。また、住民主導型で得られる多様な意見を計画に反映させるためには、実現性等の観点から行政にはアクセルとブレーキを巧みに使い分けることが必要であると考えます。こうした面から、「協働」という言葉が持つ本質は、現在においても、依然として模索中の概念であると考えます。
- また、復興まちづくりは、時として修正を繰り返しながらも「継続」していくことが重要です。明確な役割分担を行い、一遍に負担が集中しない体制づくりも重要です。
- 当市では、整備前からソフト事業の取組みを開始しました。ソフト事業はすぐに成果が出るものではなく、合意形成から体制づくり、実践までを含めて助走期間が必要です。多くの行政が経験しているように、ソフトは手間も人手もかかる場面が多くあり、協働で行う体制の重要性を今一度強く認識しています。そうした意味でも、あらゆる立場の人が一堂に会し大きなビ

ジョンを共有し、実践の歯車を動かしていくためにもワークショップは有用な手法であると考えます。

○目には見えない、効果を数値では語りにくい面ではありますが、継続と積み重ねにより確実に住民の復興まちづくりへの当事者意識は変化しています。それは行政も同じです。今の積み重ねが、将来のまちの姿を決めていくのだと実感します。次の世代にまちをつなぐことは、行政の大きな役割の一つであると捉え、パズルのピースを組み合わせるように一つ一つのプロセスを大切にしながら、今後も西予市は復興まちづくりを進めていきます。

1 1 取組について記載したホームページ

○西予市復興まちづくり計画（西予市ホームページ）

<https://www.city.seiyo.ehime.jp/shisei/machidukuri/fukkoumachidukuri/6337.html>

○のむら復興まちづくり計画（西予市ホームページ）

<https://www.city.seiyo.ehime.jp/shisei/machidukuri/fukkoumachidukuri/7543.html>

○のむら復興まちづくりデザインワークショップ（西予市ホームページ）

<https://www.city.seiyo.ehime.jp/shisei/machidukuri/fukkoumachidukuri/6734.html>

○西予市復興まちづくりかわら版（西予市ホームページ）

<https://www.city.seiyo.ehime.jp/shisei/machidukuri/fukkoumachidukuri/5905.html>

○野村高校「菜園共創プロジェクト」（野村高校 YouTube チャンネル）

<https://www.youtube.com/watch?v=5jBdbfx2H1g>

○乙亥会館 災害伝承展示室（西予市ホームページ）

<https://www.city.seiyo.ehime.jp/shisei/machidukuri/fukkoumachidukuri/7707.html>

○災害語り部「語り部 018 のむら」（西予市ホームページ）

<https://www.city.seiyo.ehime.jp/shisei/machidukuri/fukkoumachidukuri/8323.html>

○災害から学ぶパッケージ学習事業（西予市ホームページ）

<https://www.city.seiyo.ehime.jp/shisei/machidukuri/fukkoumachidukuri/9014.html>